

発行人 / 神奈川県障害者定期刊行物協会

〒222-0035 神奈川県横浜市港北区烏山町 1752 番地

障害者スポーツ文化センター横浜ホール 3 階
横浜市車椅子の会内

編集人 / NPO 法人じんかれん

(神奈川県精神保健福祉家族会連合会)

〒233-0006 横浜市港南区芹が谷 2-5-2

神奈川県精神保健福祉センター内

TEL 045-821-8796 FAX 045-821-8469

E-mail: jinkaren@forest.ocn.ne.jp

URL: <https://jinkaren.net/>

定価 50 円 (会員は会費に購読料が含まれています)

KSK じんかれんニュース

NO. 58 2021年12月号

精神科入院で日弁連調査

8割超が苦痛体験

2021.10.26 神奈川新聞より

精神科病院に入院したことがある人の内、8割が入院中に隔離や身体拘束などにより苦痛な体験をしているとの調査結果を、日本弁護士連合会がまとめた。当事者からは「人として扱われず、人生が変わってしまった」「治療という名目でやりたい放題され、地獄のようだった」などの声が寄せられた。

日弁連は「人の尊厳や主体性を奪い、人生を破壊している。こうした被害をなくすため、精神科医療の制度を改革すべきだ」としている。

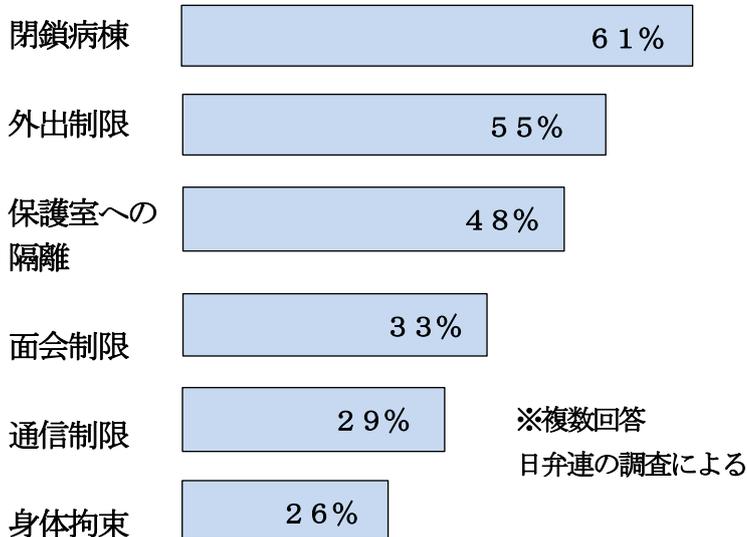
調査は、昨年6～12月に実施。精神科に入院経験がある各地の1040人に、入院中に「悲しい」「辛い」といったことがあったか尋ねると、81%が「ある」と答えた。

最も苦痛だったこととしては、外側から施錠された保護室への隔離を挙げた人が17%、入院の長期化が13%、身体拘束が12%と続いた。経験した処遇(複数回答)については、1040人のうち61%が閉鎖病棟を挙げ、保護室も48%、身体拘束も26%いた。

こうした行動上の制約を受けた人の内42%は、医師から説明がなかったと答えた。本人や親が、看護師から「もう人並みの生活はないと思ってください」「今までの生活は諦めなさい」などと言われたという回答もあった。



精神科に入院した人が経験した処遇



「座間市のアウトリーチ支援 支援現場での実践について」 研修会参加報告

2021 年 10 月 12 日、小田急線相模大野駅に隣接した、ポーノ相模大野サウスモール 3 階セミナールームにて開かれました。参加者は 30 名、講師は精神保健福祉士の池田陽子さん。

「アウトリーチ支援」とは、相談を待ち受けるのではなく、直接出向く支援の形で、国も普及を進めている。座間市の支援は、事業委託を受けた精神保健福祉士が、市職員と二人三脚で支援に当たる点に特徴があり、全国的にも珍しい制度という。

【事業の目的と現状】

生活困窮者自立支援制度の自立相談支援機関におけるアウトリーチ等の充実を行い、社会参加に向けた、より丁寧な支援を必要とする方への支援を強化することを目的とする。本事業は生活困窮者自立支援法に基づく事業の一環として実施するものであり、同法に基づく他の事業とあいまって、地域全体で包括的な支援体制の構築を図る。ひきこもりや未受診の方などを、無理に社会へつなげるのではなく本人や家族が安心して生活できるように寄り添って支援を届けることを目的としている。

この支援では、市が、国家資格である精神保健福祉士のいる事業者に業務委託し、専門相談員は、「ひきこもり」「人間関係がうまくいかない」など生きづらさをもつ人に対し、市職員と一緒に「アウトリーチ」(相談者の自宅などに出向くこと)し、悩みを聴く。支援に最初から最後まで「伴走」する。

【アウトリーチ支援の概要】

市では、生活困窮者自立支援の一環として、アウトリーチ等の充実による自立相談支援機能強化を行うもので、精神障害者に限らず、経済的な問題、就労の問題、居住の問題、日常生活の問題等、本人、家族、支援者から相談があった場合、やれない理由、やらない理由で断らず、生活に困っている相談者に地域で安心して暮らせるようなアドバイスをする。ひきこもりや未受診の方などを、無理に社会へつなげるのではなく、本人や家族が安心して生活できるように寄り添って支援を届ける。

市担当者は「職員では根拠をもって答えられないことも答えられ、的確に支援できる」と話す。病院の初診にも同行するなどきめ細かく寄り添う伴走型の支援も安心につながっている、と市は分析している。10 年以上ひきこもりの人の支援にもつながったという。市ではこれまで、必要に応じて市職員が訪問をしていた。しかし専門家ではないため、相談者が心を開いてくれない場合や、相談者からの質問に根拠を持って答えられないこともあったという。

相談員を務めている「相談オフィスわ〜くすけあ」の池田陽子さんは、県精神保健福祉士協会の会長で、市の非常勤職員としての勤務経験もある。池田さんは「市職員では躊躇してしまうような深い部分までしっかりと聞ける。また訪問することで解決の糸口が見つかることもあり、行政では手の行き届かない『グレーゾーン』の支援にもつながっている」と話す。

昨年 8 月から始まった座間市でのこの「アウトリーチ支援」に、想定を大きく上回る反響がある。専門相談員が市職員に同行して訪問し、より手厚い支援体制が整ったため、これまで市への相談をためらっていた人からの問い合わせが増えたためとみられる。

アウトリーチ支援の役割としては、本人の漠然とした不安を解消する、本人の健康な部分を見つけ延ばす、期待を与え過ぎずに悩み・相談事に共に解決を探る、プランニングをたてる等がある。

市では、家族や関係者から相談を受け、相談支援員が必要に応じてアウトリーチ支援を計画。面接を通じて、本人に接するタイミングを計る。また、

家族の接し方についてのアドバイスも行う。相談員は、本人がいなくても家族から話を聴く(間接支援)。

【具体的支援例】

- 未受診者に対する受診先探し ◦医療中断者に対する入院先探し
- 就労希望者に対する就労支援、準備支援 ◦金銭管理、生活全般の不安解決
- 経済的問題の解決(年金・生活保護受給) 等々...



(文責：三冨)

アンケート集計

**研修会「座間市のアウトリーチ支援 支援現場での実践について」 講師 池田 陽子氏
2021年 10 月 12日**

感想自由記載欄

- ・細やかな本人中心のすばらしい事業と思う。困窮者全般を対象にしているのがすごい。
座間市の着眼点はすばらしい。これこそ本物の市民支援だと思う。
- ・本人(当事者)が自信をもって生きていく権利があるとの言葉がうれしく感じた。当事者が減薬して欲しいと思っても主治医に言いづらいので、どのようにしたら良いかと思う(感じる)。
精神障害に限らず間口を広げて困っている人を支援するのはすばらしい。
- ・アウトリーチ支援の中で、ご本人からの相談をお聞きするときに、なかなか言語化するのが困難な方へどのようなアプローチをなされるかお聞きしたいです(施設関係者)。
- ・座間のアウトリーチ支援の考え方がわかってきた。広く考えた制度であり、厚労省からの補助がある、生活困窮者支援であること。
- ・座間市のアウトリーチ支援の制度が大変な効果を上げていることが良く理解できました。是非自分達の市、行政に提案したい。
- ・池田さんの歯切れの良いお話に、今後どうすればいいのか考えたり、理解することができました。自分の自治体にもアウトリーチ支援を取り入れていきたいです(行政関係者)。
- ・座間市のような仕組み(実践)をしてもらうのに、どのように行政へ要望していけばよいのか。
- ・池田さんのパワーある講演は大変良かったです。池田さんのような方がたくさんいてくださることを希望する。
- ・本人の困り事等についても積極的にかかわってくださっている事等。とても親亡き後についての理解がわかりやすかった。
- ・PSW だけでなく、行政の方が参加して下さったこと、大変有効だと思いました。どのように自分の住む自治体に働きかけたら良いのかが分かりました。
- ・社会資源が有効に使い続ける様、声を上げ続けることの大切さを実感しました。
- ・とても良い講演内容でした。ありがとうございました。
- ・アウトリーチの必要性を実感しました。
- ・池田氏の話が分かりやすく、現実的な話も含めて理解できた。
- ・具体的な話が聞いてよかった。
- ・とても参考になりました。ありがとうございました。



今後、希望する講演内容、講師名

- ・薬の処方について(減薬を医師に言いづらい)

- ・障がい者が高齢になり、障がい支援と高齢者支援の支援の違いを知りたい。何が不利益になりますか。
 - ・作業所(A 型・B 型)の運営と本人の希望について。B 型作業所の問題点について。1 人前の賃金を得られるようにするためにはどうしたらいいのか。難しい課題だと思いますが。
 - ・本日の講演のように「困ったことを抱えている」人への総合的支援を実施している行政からの報告。
 - ・訪問看護ステーションの実態 小瀬古伸幸さん
 - ・親亡き後の本人の生活支援について。
 - ・オープンダイアログ 森川すいめい氏
- じんかれんへのご意見ご要望
- ・医療支援の拡充情報(自立支援医療の他科診療)、よろしくお願いします。
 - ・医療費助成、なかなか市は動いてくれません。県の方でよろしくお願いします。
 - ・親亡き後の当事者本人が希望と安心を持って生活するにはどのようなサービスの利用と、本人が安心した心情で生活できるためにはどのようにしていけばいいのか。
 - ・本日のような講演会をまた希望します。



(アンケートまとめ:石川)

全国精神保健福祉家族大会「2021 みんなねっと東京大会」に参加して

今年のみんなねっと全国大会は関東ブロック大会も兼ねて、「誰もが安心して住み続けられる社会を目指して」をテーマに、10月7日・8日の2日間にわたり東京で開催されました。

7日の全体会は調布市文化会館、8日の分科会は北区赤羽会館で行われましたが、コロナの感染予防のためオンライン参加方式も取り入れ、全体会では入場制限を行ったため空席が目立つやや寂しい大会となりました。

全体会は、多摩草むらの会のみなさんによる爽やかなコーラスで始まりました。この東京大会のために作られたという「つくしんぼ」の歌詞には家族の思いが込められており、慰めと励ましを受けました。開会式はコロナ禍のため来賓の招待はなく、岡田久美子みんなねっと理事長、真壁博美東京つくし会会長の開会挨拶と、小池百合子東京都知事のビデオメッセージによる祝辞が流されただけのすっきりしたもので、いい感じでした。

基調講演は「当事者・家族が地域で生き生きと暮らしていくために」というテーマで、白石弘巳氏(東洋大学名誉教授、埼玉県済生会なでしこクリニック院長)の講演でした。日本の精神科医療の課題は、多い精神病床数、私立病院への偏在、少ない人員配置、専門化の遅れ、地域ケア体制の遅れ、家族の負担等があり、地域移行・訪問診療・通院支援を進めること、悪い病院をなくすこと、ショートステイを

気軽に使えるようにすることなどの改善が必要であること、家族支援にはイギリスの家族支援の考え方を取り入れること、当事者には3度のめしよりミーティングと笑いの処方箋が必要、などが話されました。

特別公演は、都立松沢病院名誉院長 斎藤正彦氏によるお話で「首都東京の精神医療を考える～都立松沢病院の取り組み～」のテーマで語られ、松沢病院に掛ける熱い思いと患者さんに対する温かい目を感じました。

東京都は、都立公社4病院で365日24時間の精神科救急を分担し、必要な時いつでも緊急措置診療ができるシステムを持っている。これができるのは松沢病院があるからであり、また、総合病院の治療になじめない精神症状の重い身体合併症の患者さんの最後の砦になっているのが松沢病院である。2020年以来の新型コロナウイルス感染症に対して、

それなりの役目を果たすことができたのは、この合併症事業の蓄積によって生まれた病棟や医療資材、医師、看護師等の人材があったればこそである。

2012 年 7 月から 2021 年 3 月までの院長の時に掲げた経営目標は 1) 民間医療機関の要請を断らない、2) 患者さんに選ばれる病院を作る、3) 業務改善によって働きやすい職場を作る、4) 地域を支え、地域に支えられる病院を作るであった。また、行動制限最小化プロジェクトを作り、隔離最小化、拘束最小

化、自分で納得できない行動制限はしない、ナースステーションを出て患者さんの声を聞く、を実行した。その結果患者さんとの関係が良くなり、在院日数が減り、民間病院との関係も改善された。いま、都立病院は独立行政法人化を目指している。これから数年すると松沢病院のパフォーマンスも変化する可能性がある。

齋藤正彦氏は院長を退いた後も一医師として現場に立っておられます。



8 日は 4 分科会が行われましたが、参加した 1 と 4 について報告します。7 日の夜、直下型地震に見舞われた影響で、首都圏の各電車が混乱して開催が遅れるなど、参加者も少ない分科会でしたが、非常に大切な内容でした。

【分科会 1】 「地域づくり ～地域移行・地域生活支援体制を考える～」

〈問題提起者 1〉井の頭病院で精神保健福祉士をしている原瑞穂さん。井の頭病院で積極的に行われている退院支援のお話でした。自宅に退院する患者さんは入院 1 年未満では 71%、それが 1 年以上になると 12%に減少し、グループホーム等への退院が多くなる。退院に向けてどんな支援を希望するか、どんな支援が必要か等を本人・家族と話し合いながら、退院後の生活の安定を目標に地域の支援者と連携しながら進めている。

〈問題提起者 2〉地域で精神障害者の支援を長年続けている千葉信子さん。団塊世代が後期高齢者となり、生産年齢人口が減少して経済問題は一層厳しく

【分科会 4】 「誰もが人生の主人公 ～子離れのススメ・親亡き後の準備～」

〈問題提起者 1〉多摩草むらの会支援者の上村茂さん。親亡き後、子どもが地域で孤立しないように、親は近所・自治会・地域活動その他ネットワークと繋がっておく事が重要。区市町村の窓口へコンビニのように気軽に相談し、常連のようになっておくと何かあった時、力になってくれる。

〈問題提起者 2〉多摩草むらの会の当事者の佐野文宣さん。父 80 歳母 72 歳、二人とも病気がち。弟 47 歳独身で両親と同居。病院に繋がらず、引きこもっ

なる。現実検討が乏しい彼らが、親亡き後も安心して生きられるためには、しっかりとしたルール作りが必要である。

①8050 問題を個人問題にとどめるのではなく、社会問題として施策・対策が講じられる必要がある。

②他の障害者と同じように自立支援で身体ケアが受けられるように。

③未治療や治療中断者を医療につなげる相談事業所が必要である。

④地域で安心して普通に暮らすために、ケアホーム事業を進める場所の提供と予算措置が必要である。

ている。自分は多摩草むらの会の B 型作業所に通所。障害年金とパート賃金で一人暮らしができていますが弟が心配。

〈問題提起者 3〉「親亡き後相談室」主催の渡辺伸さん。親亡き後の課題は①お金で困らないための準備②生活の場の確保③日常生活のフォロー。問題は親亡き後の相談窓口がバラバラなこと。全国にある「親亡き後相談室」が地域の専門家同士で連携するネットワークが必要である。(まとめ 谷田川)

速報

NPO 法人じんかれん 第 47 回『県民の集い』in 綾瀬 参加報告
『みんなで考える 精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムについて』
講師 藤井 千代 氏



コロナ禍により延期していた県民の集いが、緊急事態宣言解除のタイミングで、NPO 法人じんかれん、NPO 法人大和さくら会、綾瀬市精神障害者家族会 あがむの会の主催で、11 月 21 日、綾瀬市立中央公民館にて開催されました。

綾瀬市は、神奈川県ほぼ真ん中に位置し、横浜へは約 20 km、東京中心部へは約 40 kmの首都圏域にあり、西に大山・丹沢連峰を望むとともに、遠く富士の秀峰を仰ぎ、都心部から、

さほど離れてれていない土地でありながら、中心地には広大な畑が広がる自然豊かなまちです。

今回の県民の集いは、昨年開催予定でしたが、コロナ禍の影響で開催が 1 年延期になり、会場を 4 回も変更する等、当初の計画を様々に変えざるを得ない中で、担当家族会の皆様のご尽力と綾瀬市および会場となった綾瀬市中央公民館のスタッフの皆様の、多大なるご協力により無事開催されました。100 名限定で行われた会場は満席状態でした。

講師の藤井千代先生には、会場その他度々変更をお願いしたにもかかわらず快くお引き受けいただいたことに対し、じんかれん・担当家族会一同大変感謝しております。

今回のテーマは『精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムについて』でした。

藤井千代先生は、国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域・司法精神医療研究部部長。2015 年より現職。統合失調症の早期発見・早期介入に関する研究、自殺予防と遺族ケアに関する研究、精神科地域医療の展開に関する研究などに取り組んでいます。研究、臨床、国への政策の関わり等のかたわら、往診や訪問看護など訪問医療を積極的に実施。通院が困難、ひきこもり、在宅生活で様々な支援が必要な方への訪問活動を積極的に展開しています。身内に当事者を持ち、若くして統合失調症の暮らしに寄り添う治療と支援、日々の診察の中で当事者と一緒に悩む共同意志決定の研究から見えてきたこととしてお話し頂いた講演は、腑に落ちるものでした。

【講演概要】

「にも包括」は、“地域共生社会”の構築を目指す国の施策の方向性の中にある。誰もが“精神”的な課題に直面しこのシステムを必要とする可能性がある」と捉えて、地域に実現させようとしている。医療面では、地域における多機能型精神科診療所の役割や可能性として、外来診療の機能だけでなく、デイケアやナイトケア、訪問看護や就労支援、グループホームや相談支援など、さまざまな支援サービスを同一法人内で展開する精神科診療所が設立され、看

護師、精神保健福祉士、作業療法士や心理士などもスタッフに加わり、多職種スタッフで展開される。精神科の病床削減につながる」とともに、早期支援の体制づくり、医療を受けながら働くことも含め、福祉サービスと連携を取ることにより、地域生活にまつわる包括的な支援を受けることができるなど、生活に密着した途切れのないサービスが期待される、と話されました。



藤井千代先生

《課題 - 「にも包括」を地域に構築していく過程で》

- ◎ “精神” の問題を特別視しない。
- ◎ だれもが包括ケアを必要とする可能性がある、との認識を広める。
- ◎ 精神障害があってもなくても必要な支援を提供するのが「あたりまえ」の社会に。
- ◎ 精神障害の特性にも配慮を。
目に見えないため気づきにくい、気づかれにくい。
スティグマ（差別・偏見）のため相談しづらい。
誤解されがち。過去の不適切な対応に傷ついている人も多い。調子の波があるなど。

《リカバリーとは?》

態度、価値、感情、目標、スキル、そして(社会的)役割を変える個々の特性あるプロセスである。
リカバリーは病気による制限がありながらも、満足で希望にあふれた生活や充実した人生を送る方法である。また、精神疾患の深刻な影響のなかで、人生の新しい意味や目的を見出すことでもある。精神疾患からのリカバリーは、単に疾患自体からの回復以上のものである。



講演概要の一部を「地域・司法精神医療研究部 HP」より引用しました。

※ 紙面の都合上、関係者のご意見、ご感想は割愛させていただきました。 次号に掲載の予定です。

(まとめ三富)

- ◎ 点で支えるのではなく、線で支える必要がある。
(ネットワークによる他職種、他機関との連携)
- ◎ 訪問看護に対しては予算が脆弱(現在、ワーカーの費用は出ない)
- ◎ 地域で連携して支援をするには、それぞれの支援を受ける者のニーズが大事(本人主体の考え方を)。
- ◎ 一人一人により良い支援をするためにはエンパワメント(その人の良いところを引き出す)重視を。

リカバリーとは、「人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程であり、またある個人にとってはリカバリーとは「障害があっても充実し生産的な生活を送ることができる能力であり、他の個人にとっては症状の減少や緩和である」と定義されます。

利用者個人にとって、リカバリーは夢や希望にたどり着いた結果というより、結果に行き着くまでの旅路(プロセスあるいは過程)であることが強調されています。



あがむの会講演会のお知らせ

「どう治すか」から「どう生きるか」の支援へ ～精神疾患患者の「本音の希望」を見据えて～

講師：元東京都立多摩総合精神保健福祉センター所長 医学博士・精神科医 いせだたかし 伊勢田堯氏

日時：2022年(令和4年)1月12日(水)13時40分～(受付13時20分～)

会場：綾瀬市中央公民館3階 講堂A・B 綾瀬市深谷中1丁目3番1号

アクセス：海老名駅より バス約20分 綾瀬市文化センター下車



★ どなたでもご参加できます。 申込不要・参加費無料・筆記用具ご持参ください。

★ 問い合わせ先 電話/FAX 0467-76-3335 工藤 松子

NPO 法人じんかれん研修会のお知らせ

みんなねっと「精神科医療への提言」について

講師 公益社団法人 全国精神保健福祉会 事務局長 小幡 恭弘 氏

「誰もが安心してかかりたいと思える精神科医療の実現」を目指して、我々は何をしていけば良いのでしょうか。 提言をまとめた「みんなねっと」から小幡氏を迎えて、共に考えていきましょう。



♥ 日 時 2022 年 2 月 4 日 (金) 13:30~15:30

♥ 場 所 ユニコムプラザさがみはら セミナールーム 2

bono 相模大野サウスモール 3 階 最寄駅 小田急線相模大野駅

♥ 参加費 無 料

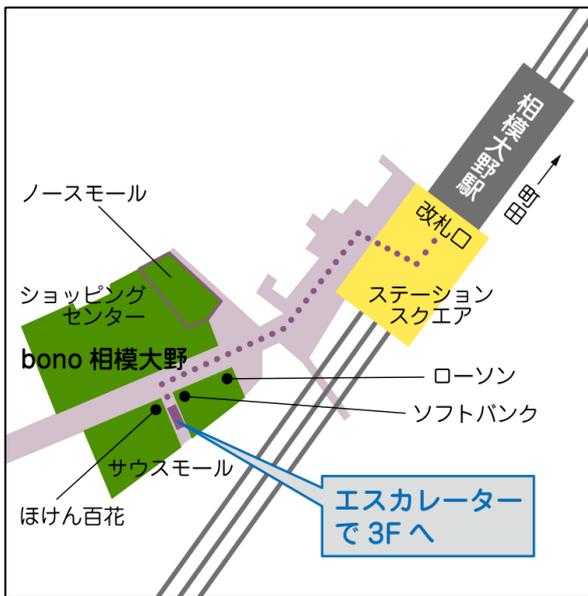
♥ 定 員 53 名 (申し込み順)

主 催 NPO 法人じんかれん

咳・発熱等、症状のある方はご遠慮ください。

お問合せ・申込み NPO 法人じんかれん (事務所 火・木 10:00~16:00)

電話 045-821-8796 FAX 045-821-8469



じんかれん家族相談のご案内

◆研修を積んだ家族相談員による電話相談

毎週水曜日 10時~16時

☎ 045-821-8796

困っていること、悩んでいることなど
お話し下さい。

◆精神保健福祉の専門家による面接相談

相談の曜日が7月より水曜日から火曜日に
変わりました。

毎月第3火曜日 13時~16時 (要予約)

相談場所: 相模原市南区 3-3-2

ボノ相模大野サウスモール 3 階

「ユニコムプラザさがみはら」

ミーティングルーム

予約電話: 火・木曜日 10時~16時

☎ 045-821-8796

※相談料無料・相談内容は秘密厳守します。

【編集後記】

外出自粛、外食禁止、飲み会中止と今まで経験したことのない生活パターンの変更を余儀なくされてきました。久振り仲間と会い、飲んで、食べて、おしゃべりしてストレスを発散しました。長い間インドア生活を強いられ、足腰の衰えによる心身の不調をきたしています。これからは、できるだけ、外出を心掛け、アウトドア生活を楽しまたいと思っています。 (三富)